

浄土

monthly
JŌDO

September 2001

9



法然上人鑽仰会

日本テレコムで、
21世紀も
思いきりしゃべったろ。

市内も、県内も、県外も、国際も。
マイライン選ぶなら、日本テレコム。

OK!

マイラインまると、日本テレコム。



●マイラインのお問い合わせは
お客様センターまたはホームページへ



0088-82

〔無料〕〔受付時間〕9:00～21:00〔年中無休〕

●インターネットホームページ

<http://www.japan-telecom.co.jp/>

電話会社選択サービス

マイライン

平成13年1月10日申込受付開始

平成13年5月1日サービス開始

マイラインの「日本テレコム」への
お申し込み方法

「マイライン」「マイラインプラス」は、市内通話、同一県内の市外通話、
県外への通話、国際通話の4つの通話区分で、ご利用になる電話
会社を選んで登録する、電話の新しい制度です。月々のご利用料金は
かかりません。日本テレコムをお選びになると、0088(国内電話)、0041
(国際電話)などの番号を押さなくてもご利用になります。現在、日本
テレコムにご加入の方の割引サービス等は継続してご利用いただけます。

日本テレコムにご加入の方へは直接、「マイライン申込書」をお送りいたします。
未加入の方は、下記のお客様センターまたはホームページへお問い合わせください。

※「マイライン」「マイラインプラス」は、NTT東日本・西日本のサービスであり、日本テレコムはマイライン事業者協議会のメンバーです。

インターネット(ODN)も、携帯(J-PHONE)も、通信まると日本テレコム。

浄土

2001/9月号 目次

法然上人のおうた	藤堂恭俊	2
表紙の言葉	宇高良哲	9
上人様の後ろ姿を仰ぐ	井上洋治	10
響流十方	林田康順	22
新連載 民話をたずねて	石崎敬子	26
くすり箱	市川真人	30
書評	真野龍海	32
特集・総本山知恩院吉水講50周年		34
Jフォーラム		47
誌上句会	選者＝増田河郎子	48
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	51
編集後記		52



表紙題字＝浄土門主 中村康隆猥下
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

さへられぬ

光もあるを

おしなべて

隔て顔なる

朝霞かな

後編

藤堂恭俊

大本山増上寺第八十六世法主

佛様のさとりの内容というものは、阿彌陀様だけが特別に、立派なおさとりを開かれて、他の佛様は駄目だなんて、そんなものではありません。どの佛様もおさとりの内容はみんな一緒なんです。真理というのとは一つなんです。だからいくらスタートが違っても、究極のところは一緒でございます。しかしそこから後はどうなるかということが違うわけです。ずつとさとりの世界で胡座をかいて、そのさとり悦びにずつと浸っておいになるのか、このさとり悦びを何とかして一般の人達にもお裾分けしたいと思ひになるのか、更にもっと進んで、困っている者が沢山いる。自分だけ一人歩きしているように、偉そうな顔して歩いているけれども、六道の巷をあっちウロウロこっちウロウロ、欲に溺れたり、怒り腹立ちの心によって我が身を焼いたり、ものの道理を踏み外して躓いたり転んだりしているじゃないかと、もう見ちゃおれんと、何としてもそういう連中をちゃんと一人歩きが出来るように、護り導きたいと、そういうたつての願ひをお起こしになる佛様がいます。その願ひを起こしたからには、何としてもそれが救えるようにしなければなりません。一人歩きが出来るようになるためには、どうすればよいか、そのためには「我が名を称えよ」と、「我を呼べ」と、必ず、一人歩きが出来るように、「ちゃんと迎えに行くぞ」と、そこまでお膳立てをして、わたし達には、「我が名を称えよ」「我を呼べ」と、大昔から、阿彌陀様が佛様におなりになったその瞬間から今日に至るまで、呼び続けに呼び続けられている、そのことにやつと今気づいて、その様にして、お念佛を申さして頂くわけでございますわ。だからその出発、さとりの内容は皆一緒なので、一緒だけれども、衆生を救済をするということになりますと、それぞれの、佛様が皆違うわけです。阿彌陀様はその中では一番私達を救って下さるという面では、一番微にいり細にいつて、このわたし

達を救つて下さるという、そういうことなのでございます。

その次は、『往生礼讃』の日中のところでございいます。「弥陀独り坐して真形を顕す。真形の光明法界に遍す。光觸を蒙る者は心不退なり」、そして有名な、「弥陀身色金山の如し。相好光明十萬を照す。唯だ念佛のみありて光攝を蒙る。當に知るべし本願最も強と爲す」とあります。増上寺の新しい講堂のことを「光攝殿」と名付けましたのはここからとっておるわけでございます。念佛申す者はみんな、阿彌陀様の光明によつて摂取されて、皆が皆兄弟のように、相仲良く和することが出来るという、そこまでいかないといけないのです。だから念佛を申すということが、一番、わたし達の集団にとつては大事なことで、お念佛も一般のお方に体験をして貰いながら、わたし達のお念佛の教えを悦び、進んでいただけるような方法をしなければいけないと、そういうような意味も含めて、「光攝殿」というような名前にしたのでございます。

そこで問題は、阿彌陀様の真形と光明になります。真形の光明とは、阿彌陀様のお身体を通して、光明がわたし達に照らして下さるということです。従つて、光觸、光に触れると書いてあります。光觸を蒙る者は心が皆退転しない、不退転に住することが出来るということです。そのようにして更に、三尊礼のところにいきますと、彌陀のお身体は金山のように、金で光つておるといふ、まさにお身体全体が光明であるということでございます。相好の光明十方に、もう身体全体でもつて、あらゆる世界を照らして下さっている。しかしながらお念佛を申す者が、その光明によつて摂取されますということでございます。

それは、お念佛を申したという、そのこちらの側の働きで、光觸を蒙るのじゃない。むしろ、始めからそういうようなお約束というか、阿彌陀様の暖かいお広いお心があつて、

「我が名を称える者を」という、その思し召しの結果、光觸を蒙るんでありますから、そのことを敢えて、本願といい、阿彌陀様の本願は最も素晴らしいんだということです。

その次に、これも『往生礼讃』に序文があります。六時礼讃が済んだ後にも長い文章がありますので、始めの六時礼讃が始まる前の序文と、六時礼讃が済んでからの文章、これは後序というようにわたし達は表現をしておるわけです。

その前序の中に、「光明名号攝化十方」、阿彌陀様が、他の佛様と同じように、おさとりをお開きになつたけれども、衆生救済ということになると、一番優れておる。その内容は光明名号を以て、一切の衆生を攝化して下さっておるといふ、こういうことなのです。だから光明名号でございますから、光明は阿彌陀様からわたし達に、更に名号は、阿彌陀様のお心を心として、南無阿彌陀佛の貴方の名を、お応えをする、そこに初めて波長が合いますから、救済ということが成立するということです。

そこで、その次に始めの問になるわけでございます。これも論註の中で、

「問うていわく。若し無礙光如来の光明無量にして十方の國土を照すに障礙するところ無しと言わばこの間の衆生何を以てか光明を蒙らざる。光照らざざるところあらば豈に礙あるにや。答えていわく。礙は衆生に属す。光の礙にはあらざるなり」と、このように書かれています。この問いの、前半の文章は、『阿彌陀經』の文章をそのまま踏まえた文章でございます。「若し無礙光如来の光明無量にして十方の國土を照すに障礙するところ無し」といったなら、「お経にはそう書いてあるじゃないか」と、「しかしながら今、現にここに、生きておるわたし達は、その光觸を蒙つてはおらん」と、「蒙つておらなきやならんのに、未だ光觸を蒙つておらんのは、阿彌陀さんの光明は、無礙光じゃないのか」、こういうそ

の問いに対して「いやいやそうじゃないんだ」と、「疑は」、「遮つておるのはこちらの方にあるのであつて、そちらにあるんじゃないんだ」と、こういうことがもう、六世紀の頃から問答されておるわけでございます。

更に、これは『観無量寿経』の御文章の始めの方でございますが、「世尊韋提希に告げたまわく。汝今知るやいなや。阿弥陀佛ここを去ること遠からず」とかかれています。

ご存知のように、『観無量寿経』というのは王舎城の、悲劇で始まるわけでございます。その悲劇の中心人物が、韋提希というお方で、このお方がマガダ国の国王のお后であります。そのお后よりも先に国王ビンピサラ王自身が自分の息子によつて幽閉をされる、そのところに韋提希夫人が、監視の目を逃れて、食べ物ズーツと運んでおられた。王子は「もう国王はいい加減に死んでおるだろう」と思つて、その幽閉をされているところに入つて訊いてみると、「いや実はそうじゃない」、「お后様が食料を運んでおいでになります」と、それを聞いて逆上して、この韋提希夫人を殺そうとするわけです。我が子が自分の母親を殺すという、もう大臣が寄つてたかつて、「そういうことはやっちゃいけないんだ」と、「お父さんを、父王を殺すことはあつても、お母さんを殺すことはないんだ」と、「そんなことをすれば大変なことだ」と、戒められて、やつとの思いで、それをとり止めて、韋提希夫人を別のところに幽閉するわけです。韋提希夫人が聞いてみれば、自分のお腹を痛めた我が子が、こともあろうにお釈迦様の従兄弟であるダイヴァダッタに唆かされて、国王を幽閉している。もうこの鬱憤はやるせない思いでございます。お釈迦さんにそのことまで訴えるわけです。訴えて、そうして悩みのない憂いも悩みもないところ、「無憂悩処、憂いも悩みもないところに、わたしは行きたい」ということをお願いをするわけです。

そこでお釈迦様が、神通をもつて佛様の国土をずっとお示しになります。そうしてそれを見た韋提希夫人が、その多くの佛国土のなかでも阿彌陀様のお浄土こそ憂いも何もないところということで、阿彌陀様のお浄土に往きたいと意志表示をしたのです。そういうことを通して、お釈迦様が韋提希夫人に、「汝今知るや否や、阿彌陀様はここを去ること遠くじゃないんだぞ」と言われているのです。

ところが『阿彌陀經』になりますと、「佛長老舍利弗に告げたまわく。これより西方十万億浄土を過ぎて世界あり。名づけて極楽という。佛まします阿彌陀と号してたてまつる」とかかれてあります。ここを去ること十万億土という、佛土を過ぎた遙か彼方に阿彌陀様が坐っている。だから、二つ揃いますと、お経というのは嘘ばかり書いてある。片一方では近いと書いてあり、片一方には遠いと書いてあるじゃないかといわれてしまいそうです。これは、お念佛をしない人にとつてはなるほど極楽は遙かに遠い、しかしお念佛を申す人には極楽は近い。つまり煩惱によって隔てられているといつても悪くはないと思います。韋提希夫人が、阿彌陀様のお浄土にお参りしたいといったのは、お釈迦様が阿彌陀様のお浄土をお示し下さったから、心の目で見ることが出来たのですから、やはり煩惱を持ったままでございますけれども、やはりお念佛を申すということが前提で、遠いのか、あるいは近いのかと、遮るものが、佛様の側じゃないこちらの側に、自分自身にあるのだという、そういう受け取り方でございます。

それから最後に『無量寿經』の中に、阿彌陀様を讃えたところがございまして「それ衆生ありて この光に遇う者は三垢消滅して身意柔軟なり。歡喜踊躍して善心生ず。若し三塗勤苦の処に在りてこの光明を見たてまつらば皆休息を得て腹た苦惱なし。寿終の後皆解

脱をこうむる」と、現当二世の御利益がここに示させておるわけでございます。「三垢消滅」これは貪瞋痴の垢でございます。外からひつついたモノは塵でございますけれども、垢はこれは内分泌物でございますから、生まれながらにして持っている、貪瞋痴という三つの垢でございます。それが消滅すると書いてあるのです。そうして、身も心も共に柔軟になるという、柔軟という言葉もなかなか意味深長な言葉でございます。

まあそのようにして、この前の月影のところでは、阿彌陀様の清浄光、歡喜光、智慧光の三つの光明が、わたし達の貪欲と瞋恚と愚痴とを照らし、お念佛を申しますと、貪欲の者は清浄光のお働きを頂戴することによって、戒を保ったことのない身でありながら、戒を保ったお方と変わらない、清浄な身にさしていただくことが出来るのです。怒り腹立ちの心が旺盛な人であっても、お念佛を申すことによって、阿彌陀様の歡喜光という光明に触れることによって、今まで忍辱という、堪え忍ぶというような、六波羅蜜の中のあの忍辱の修行をしたことはないにも関わらず、忍辱の人と等しいお方に、変わらしていただけるのです。最後はこれ愚痴でございますから、道理を踏み外してばっかししておる人ではございますけれども、お念佛を申すことによって阿彌陀様の智慧光に触れることによって、こんどは六波羅蜜の中の智慧波羅蜜を修行した人と同じような、智慧を持つことが出来るというのです。そういうことのお話を申したわけでございます。

(談)

法然上人 絵伝

(大本山増上寺蔵)

道俗教化の図（立教開宗）

法然上人は承安の五年（一一七五）春、四十三歳の時に「濁世の凡夫生死を離るる教、ただ浄土の要門にしかず」と確信されて、自ら毎日七万遍の念仏を称えられ、また門弟や道俗たちにも積極的に念仏の教えを説かれた。まさしくこの場面は法然上人による最初の一般道俗に対する教化であり、浄土宗の立教開宗にあたるものである。法然上人が屋内の門弟や庭上の俗人に対して、穏やかにして自信に満ちた表情で教化されている様子が巧みに描かれている。

増上寺蔵の残欠二巻本の詞書の特色は、法然上人の立教開宗の所依の經文を、浄土宗で多く引用されている善導大師の『観經疏散善義』の「一心専年弥陀名号 行住坐卧不問時節 久近念念不捨者 是名正定之業 順彼仏願故」ではなく『本朝祖師伝記絵詞』と共に、中国天台宗之祖湛然の『摩訶止観輔行伝弘決』この「諸教所讃多在弥陀」としている。注目される記述である。

（宇高良哲・大正大学教授）

前編

法然上人鑽仰会講演概録

上人様 の後ろ姿を

仰ぐ

井上洋治

私はキリスト教のカトリックの神父でございまして、法然上人さまに關してはいわばズブの素人といつていい門外漢でございます。そのため、これから私のする話にどこか間違っているところがあるかもしれませんが、お許しの上お聞きいただければ幸いです。

まず、「なぜカトリックの神父がそこまで法然上人さまに魅かれて、本を書いたのか」と不思議に思われている方もいらっしゃるかもしれませんので、初めに私と上人さまの出会いから話をさせていただこうと思います。

私は小学校は東京でしたが、今考えてみると毎日野球ばかりやっているような、大変幸せな小学校時代でした。しかし、中学校半ばごろから「死」というか、「人生」という問題に非常に悩まされ始めました。死というものはいくら逃げても逃げきれない。必ず死ななければならないし、勝つこともできない。

私の心象風景というのは、長い砂浜の海岸

線がありまして、その海岸線に風が吹いてくる。そして、一粒の砂が静寂の中、風で右から左に動く。それで、また砂浜は元の静寂に戻っていく。自分の人生なんて、たかだか一粒の砂粒が右から左に動くだけのことではないか。前の静寂と後の静寂は何も変わるところがない。そういうふうな感じでした。

そして、人は必ず死ななければならない死刑囚であり、会えば必ず別れなければならないものだ。こんなことを同窓会などで友だちに言うとなんか「本当に変わったなあ」などと言われるのですが、中学のとき以来、本当にそれには悩まされました。

おわかりいただけると思うのですが、そういうことにつかまってしまうと、「いい学校に入って、ちよつといい会社に入って出世をし、好きな女の子と結婚して」などと言ってみても、「すべては必ず消えてしまうものなのだ」となる。こうなってくると、だんだん勉強にも熱が入らないような気持ちにな

ってくるんですね。まるで深い霧の中で、右も左もわからず、砂丘のようなところを上がっても下がり、上がっても下がりとするような感じですよ。

それでも学校の先生はおっかなかったし、家の親父は非常に厳しい人でしたから、今みたいに不登校までする勇氣はなかった。かえって「逃げださなければいかん。旧制高校の寮に入れば何とかなるのではないか」というぐらいの気持ちでした。人生で「あれだけはもう繰り返したくない」と思うほど、私にとっては本当につらかった時期でした。

当然のこととして、私は宗教に助けを求めました。私の父は神奈川の津久井の出でございました。学問がしたくて東京へ出てきた人で、次男坊でした。そのせいか、私の家には仏壇というものはありませんでした。お坊さんというもの、見たことぐらいはあっても話をしたことはなく、大変縁遠い存在でした。神社などはよくお参りに行かされましたが、

神主さんと話をしたこともありませんでした。

私の家で宗教として一番近かったのは、やはりキリスト教でありました。これは後で聞いた話ですが、私の父が田舎から出奔して東京へ出てきたときに、プロテスタントの教会に行っていたらしいのです。それで、私は小学校一年までは大阪にいたのですが、父が日曜学校に連れて行ってくれたらしい。「らしい」というのは余りはつきり記憶がないからですが、とにかく日曜学校に行っていたということは覚えています。

そういう関係で、東京に父が転任してきたとき、姉が四ツ谷にある雙葉というミッションスクールに入りました。ですから、全体からいって私に一番近い宗教というのはキリスト教だったわけです。

そのキリスト教に私は助けを求めました。プロテスタントの教会にも行ってみました。カトリックの教会にも行ってみました。



しかし、キリスト教の教会は私にとって敷居が高く、なかなか入りにくいものだったんですね。

お寺や禅寺もよく行きました。お寺の境内に入ることは何ともなかったのですが、お坊さんも余り知りませんから、教えを乞うのは大変勇気がいります。結局、庫裏を自分で叩いてお坊さんに人生の意味を深く聞くという勇気までではなくて、お寺の境内の中や回りをうろろろしていたというような感じでした。

そういう意味ではお寺も教会も非常に遠くて、苦しい歳月を送っていました。

そのときにキリスト教の壁が高かった理由の一つは、やはりモラルの厳しさというのでしょうか。お読みになったことがあるかもしれません。島崎藤村に『桜の実の熟する時』という小説があります。それは藤村の自伝のようなものなのですが、その中で学校の先生が教え子に恋をするわけです。

教え子に恋をしたために、何をしていても恋人の白い腕が目の前に見えてきて、お祈りがうまくできなくなるんですね。お祈りをしようとする、その少女の腕が出てくる。それで、「お祈りをする事で神さまを冒瀆しているのではないか」という感じになり、結局その主人公は教会を離れていきます。

芥川の作品などにもよく出てきますが、「キリスト教の神というのは、猥談だけしていても地獄に叩き落とす恐ろしい神さまだ」というのです。特に正宗白鳥などはおもしろ

いですね。彼は晩年、「自分は平安を求めるためにキリスト教に入ったのに、結果としては殉教を強いられるようになり、『殉教もできないような奴は地獄行きだ』と言われるような思いをして、非常に苦しんだ」と言っています。

私も若いときでしたし、そのようにキリスト教の壁にはね飛ばされたような感じがありました。しかし、そんなときに私を救ってくれた一人のカトリックの聖者がいました。カトリック教会では「リジューの聖テレーズ」と言われている、テレーズ・マルタンという人です。

この方は十五歳でフランスのリジューというところの修道院に入りまして、二十四歳で亡くなった、いわば天才であります。彼女の言葉に「人間は自分の力できれいになるものではない。神さまの懷にまづ飛び込んでいけば、神さまがきれいにしてくださるのだ」といういみのものがあります。

これは他力というのでしょね。私はその方の思いに接したとき、初めて救われた気がしました。「これは悪い。こんなことは汚れている。こういうことはいけない」と、後ろ鉢巻きでまるで蚤を潰すように自分の力でがんばっていくのではなくて、本当に「お任せして飛び込んでいくのだ」と言うんです。

この聖女は「自分ではなく、あちらさまがなさってくださいなのだ」ということだけを九年間うたい上げています。二十四歳で亡くなっていますから書いていたものも、いかにも少女的なのですが、私は大変な宗教的天才だったと思っています。

その方に出会って本当に救われたという気がしましたので、私は「それなら、信者になるう」と思い、なつてしまいました。しかし、それまで大変苦しかったものですから、このテレーズの境地を何とかして自分のものにしてみたいと思ったのです。そして、テレーズがカルメル会という修道会に入っていたこと

を知りましたので、非常に単細胞でしたから「なるほど、カルメル会というところに入ってみればこういう境地に行けるのかもしれない。それでは入ろう」と思ったんですね。

ところが、教会で聞きましたら「日本にはカルメル会という修道会はない」という返事でした。「ないならどうしたらいいんですか」と聞いたら、神父さんが「フランスに行くしか仕方がないだろう」と言いますので、「それじゃフランスへ行くか」と思ったんです。そこで、まずは手紙を出そうということで、辞書を引ながらでろくな文章ではありませんせんが、「私はこういうことでリジューのテレーズという人に会い、非常に救われた。だからどうしてもお宅の会に入りたい」と書いて送ったのです。

そうしたら、向こうも「変わった奴だな」と思ったのでしょうか、「じゃ、よからう」と言ってくれました。「ともかく大学だけは出て来なくちゃいかん」と言われたので、大

学だけは出ました。当時はまだ講和条約ができていないときで、GHQでは向こうで生活の保証をしてくれるという書類があれば渡航が許されないということでしたが、それも向こうで書いてくださいました。そして一九五〇年、まだ少し焼け野原が残っているころ、フランスに行つてカルメル会の修道院に入つたのです。

修行時代は祈りと労働ぐらいでしたが、一生懸命やれば何か見えてくるだろうと、希望を持って二年ほどやっていました。

その後またフランスへ行つて、それは大変よかったのですが、今度は神父になるために勉強しなければならなくなりました。それで哲学や神学など、むずかしい勉強が始まったのです。そうすると、だんだん精神的な窒息感のようなものに苦しむようになってきました。

今考えてみますと、これは私の血の中に流れているものと、西洋二〇〇〇年の長い歴史

と伝統の重みとのギャップだったのでしょうか。特に西洋では主知主義、つまり知性というものに対してあまりにも比重のなかった考え方がありましたし、また人間中心主義が非常に強いという感じを受けました。

人間中心主義というより個の強さ、自我の強さというのでしょうか。これはヨーロッパ近代の特徴なのではないかと思います。中世から前はそれほどでもなかったのですが、ヨーロッパ近代は自我の解放・個の解放というところから始まっていくような気がします。そういうところがどうもうまく噛み合わない。それでだんだん精神的に窒息するような感じになってきたのです。

しかし、自分はもうそこまで飛び込んでいましたから、イエスさまを追いかけていくのは自分の役割だと思っていました。ただ、「これはちよつと違う」と、ヨーロッパとの距離感を非常に強く感じたわけです。

それでも結局七年半ぐらい修道院にいて、



ロシア正教などいろいろな考え方に接するうちに、「日本人である私は、自分の血の中に流れているものを捨てるとかやめるとかではなく、それを大切にしながらイエスさまの福音を捉えることができるのだ。そうすればいいのだ」というところに到達しました。

そのとき私は日本に帰ってみようと思ったのです。そして帰国してから、「では自分の血の中に流れているものは一体何なのか。これを自覚したい、言語化したい」と思いまし

た。

それはなぜかと言いますと、次のような理由です。私は大学で西洋哲学を専攻しましたが、お年の方はわかりになると思いますが、昔の旧制高等学校というのは西洋文化を主として教えていたように思うのです。岩波文庫でも主に赤の帯を読んでいますから、西洋の文学や歴史には詳しいのですが、日本の文化については余り知らないのです。

今考えますと、明治の元勳たちが「西洋に追いつけ、追い越せ。そうしなければ植民地になるぞ」と日本の方向を決定したからなのでしょうね。それが少なくとも終戦当時、旧制高等学校を動かしていたのではないでしょう。このごろになって、私もその流れの中でポチャポチャとやらされていたのではないかという気がしています。

そういう教育を受けていましたから、日本のことはさっぱり知りませんでした。仏教についても同様です。しかし、向こうの人が仏

教についてさかんに聞くんですね。それなのに何もわからない。「日本人だから仏教文化で育っているはずなのに仏教を知らないで、恥ずかしくなって日本から本を取り寄せる」というのが大体戦前の留学生の状況だったようです。

私も「やはりこれではいけない」と、日本の文化を知ることから始めようと思いました。余り聞く人もいなかったものですが、かなりゆきあたりばったりで、まず飛鳥、奈良、京都を時間があれば散策したり、鈴木大拙や和辻哲郎、小林秀雄辺りをやっていけば何となくわかるのではないかと思って一生懸命読んできました。

そうして、日本に帰ってきてから六年目ぐらいでしょうか。私は当時教会で働いていたのですが、一九六四年三月のこと、洗足池の辺りを散歩していて、とある本屋に立ち寄りましたら、亀井勝一郎の『日本精神史研究』という本がありました。私は「日本人の精神

史がたった四冊ぐらいでわかるんだったら、これはいいな」と思いまして、早速買いしました。

その三巻目が『中世の生死と宗教観』で、そこに法然上人の『選擇本願念佛集（せんちやくほんがんにんぶつしゅう）』の一部が載っていました。これが私と上人さまとの最初の出会いだったのです。私にとってはものすごく衝撃的なものでした。何が衝撃的だったかと申しますと、亀井勝一郎が引用して彼なりの注解を加えていた、次の言葉でした。

「お寺にお像を寄付したり、お塔を建ててあげられるお金がある人は、そういう寄進によって救われるかもしれない。また、頭がいい人はたくさんお経を勉強することで浄土往生ができるかもしれない。そして、意志の強い人はたくさん戒律を守っていくことで、浄土往生の条件が努められるかもしれない。

しかし、それならば金がなくて頭が悪くて、意志が弱い人間はどうしたら救われるのか。

救い（浄土往生）の望みを断たれるであろう」。つまり、「金がなくて頭が悪くて意志が弱い、どうしようもない庶民がどうしたら救われるんだろうか」という悩みが法然上人を捉えていたということです。

私はこの言葉に出会って以来、法然上人を忘れたことはありません。その理由を何と表現したらいいのでしょうか。同じ宗教者として、上人さまが持つておられるところの、庶民の涙と悲しさをずっと聞き続けておられた優しさ、勇気、信仰というのでしょうか。

その後ろ姿を私はいつも鑑として仰いでいます。それは最近に至るまで全然変わっていません。最初に衝撃を受けたときと同じです。私は初めてその言葉を読んだとき、宗教者として実に恥ずかしいと思った。何が恥ずかしいと思ったかと申しますと、当時カトリック教会にはたくさん錠がありました。特に私が悩み苦しんだのは器具を使つての産児制限反対の問題です。私はカトリック教会とい

う組織の一員として、司祭として、どんなにそれが苦しいかをわかりながら、信者の人にそれを押しつけていた。すなわち、「意志が弱い人の救い」というものに対して非常に冷たかったと思うのです。

それからというもの、上人さまの後ろ姿をずっと見ておりますと、宗教者として実に大変な生涯を送っておられるんですね。先ほど私は「庶民の涙と悲しみをあれだけ聞き続けた人はいないのではないかと申しましたが、当時の京都の庶民の状態というのは、時代的にまた極端に悪かったのです。

たとえば、「養和の飢饉」という大変な飢饉がありました。ご存じでしょうが、鴨長明の『方丈記』を読めば、飢えのため弱り切って倒れている人は水溜まりに魚がうごめいているようであり、土塀や道端にも数え切れないくらいだったと書いてあります。

そんな中で勉強したり、お金を寄附したり、戒律を守っていくというようなことは、経済

的にも地位的にも非常に優れた人だけができることです。イエスさまの世界でも全く同じですが、大多数の人は明日の食事をどうしようかという状態で、下敷きになって毎日涙で暮らしている。「お像を寄付しろ」などと演説をしてもそれは不可能に近い。中にはできる人もいたかもしれませんが、大部分の人はできないぐらいの悲惨な状況にいました。

さらに、これもイエスさまの状況と似ているのですが、そういう人たちに対しておおかたの宗教指導者層は、「お前たちはそんなに加減な生活をしているから、地獄へ行くんだぞ」と烙印を押していくんですね。

地獄と言えば、当時の地獄絵というものはすさまじいものがあつたと思います。私は西行が理屈なく好きでよく読むのですが、彼はすごい。豪傑というところとありますが、徹底した人ですね。その西行が地獄絵の前で詠んだ歌を見ると、あの西行でも「こんなところに行くのか」という恐れと苦しみのような

なものがあつたことがよくあらわれています。それだけ地獄絵には迫力があつて凄かつたのだと思います。

ですから、地獄行きの恐怖はどれほどだったでしょう。庶民はこの世で飢えに苦しみ、さらに「死んだ後は地獄だ」と追ひ詰められていく。私は「その悲しみと痛みをどうしたら救うことができるか」ということに賭けていたのが上人さまの生涯だったのではないかと思います。

こうした上人さまの後ろ姿の前で、私はいかに自分が同じ宗教者としてインチキであるかを教えられました。ですが、法然上人さまという方は「自分はなんてインチキな、だめな宗教者だろう」と感じたときにも、決して「だからお前はだめなんだ」とはおっしゃらない。そういう感じがする方なんです。何とも、お会いしてみたい方だと思っています。

もう一つ、亀井勝一郎の本を読んだときにすごく感動した話があります。それは『平家

物語』巻十からの引用で、平重衡が「黒谷の聖（法然上人のこと）に会いたい」というくだりです。学者の中には「そのとき上人は黒谷を出て京都に来ているから、これは作者のフィクションだ」という人も多いようですが、私はやはり「火のないところに煙は立たない」と思う。この話には上人さまの一人の宗教者としての力強さが非常によくあらわれています。

平重衡は清盛の命令ではありますが、東大寺の大仏殿を焼いてしまった男です。当時の信仰からすれば寺を焼き払うなどとてもない行為です。今の私たちからはとても想像がつかないくらいで、地下鉄サリン事件よりもはるかにひどいかもしれません。日本中が彼を仏敵とみなし、何千回地獄に落つこちても当たり前だと思っただけです。

それぐらいのことをやったため、重衡はもちろん切られて殺されるのですが、獄中では「法然さまに会いたい。会って泣きたい。『自

分でも救われるだろうか」と聞いてみたい」と言います。すると、法然上人さまは重衡に会いに行く。仏敵で、悪魔の権化と言われ、地獄に行くに値するような人間のいるところに会いに行くんです。しかも、「仏さまはちゃんと救ってくださるよ」と、本当に後悔して涙を流している重衡の手を取って一緒に泣いた。少なくとも『平家物語』にはそう書いてあります。

私は自分を振り返ってみて、これはすごいと思う。宗教者として最高の行為です。なかなかできるものではない。それこそ重衡と一緒に既成仏教から叩き出されるかもしれないのに、一人の人間の悲しみと涙を見捨てることでできないんですね。イエスさまの生涯も同じです。一人の人間を見捨てて通れない。それは偉さというのでしょうか。宗教者として私にはできない偉さがあります。

私はそのとき、少し言葉は悪いですが、法然上人さまの虜になってしまいました。上人

さまは鑑として私の生き方を正してください。『それはだめだ』と言ってポカッとやるのではなく、温かい後ろ姿です。そこに非常に魅かれるものがあるんですね。よく考えてみますと、私はいろいろなところでそれを感じているのです。

(つづく)

略歴／いのうえ・ようじ

一九二七年生まれ、東京大学文学部卒業。フランスの修道院に入会、帰国後カトリック司祭になられ、一九八六年より「風の家」を主宰されている。法然上人に深い関心を寄せられている神父さんである。著書に『法然——イエスの面影をしのばせる人』『日本とイエスの顔』、『まことの自分を生きる』他。

貪瞋煩惱の敵にしばられて、三界の樊籠にこめられたるわれらを、
弥陀悲母の御心ざしふかくして、名号の利剣をもちて生死のきづな
を切り、本願の要船を苦海の波にうかべて、かの岸につけ給うべし
と思ひ候わんうれしさは、歡喜の涙たもとをしぼり、渴仰のおもひ
肝に染むべきにて候。

〔往生浄土用心〕

貪りや怒り、さまざまな煩惱といった敵にしばられて、迷いの世界で
ある三界という牢獄に閉じ込められている私たちを、阿弥陀さまは我が
子をいつくしむ母親のような深い慈悲の御心のもと、名号という鋭い剣
で生死流転の絆を絶ち切り、苦しみ多いこの娑婆世界にご本願という哀
れみ深い船を浮かべ、お浄土に導いて下さるのです。そう思う時、うれ
しさのあまり、着物の袂は喜びの涙でしぼれるほどにもなり、阿弥陀さ
まを仰ぎ慕う気持ちには心に染み入るほど強くなるに違いありません。

放生会―穴子の気持ち―

ピチャン、ピチャン。汗びつしよりで読経する私を尻目に、まるでもうすぐ川に放たれることを知っているかのように、尾で水をはじいては穴子たちが桶の中を所狭しと泳ぎ回っています。そのむこうでは、冷たい氷水に浸ったアサリたちが、やはり放たれるのはまだかまだかと、時たまひょつこりと顔を除かせています。

去る七月二十四日。三十八・一度という七月の都内では観測史上最高の記録を更新した炎暑の日、当山で放生会が厳粛に営まれました。放生会とは、お釈迦さまがお示しになられた不殺生戒の思想にもとづいて一度捕らえられた生き物を山や川に解き放つ行事です。

昭和二十八年、生麦魚貝商組合の主催で始められた放生会も、今年で四十八回目を迎えました。当日は、多くの組合員の方々が当山に集まり、本堂内陣には多くのお供え物を共にこれから放たれる魚貝がまつられました。本堂での読経の後、近くの栈橋から二隻の釣り船に分乗し、鶴見川を下ります。お念仏を称える中、河口付近で魚貝を放ち、名号札を川に流します。一般的な放生会では寺の境内

にある池や沼に生き物を放つのに対し、船に乗って赴く当山の放生会はかつて漁港であった生麦ならではといった風景です。

船中で、法然上人の次のお言葉が頭に浮かびました。

魚くうもの往生せんには、鶏ぞせんずる。魚くわぬものせんには猿ぞせんずる。くうにもよらず。くわぬにもよらず。ただ念仏申すもの往生はするとぞ、源空はしりたる。

〔魚食と往生について示される御詞〕

魚貝や肉類に限らず、お米一粒・野菜一切れにしても、誰しも人は生き物の命を奪わずには一瞬たりとも生きてはいけないお互いです。生きるということは、殺生を犯し続けることと同義とも言えるでしょう。そして、いろいろと理屈をつけては、不殺生戒をはじめとするさまざまな戒律をあたかも保っているかのようにうそぶいていた当時の仏教者たちに対し、法然上人はご自身のありのままの姿を包み隠さずに「わがこの身は、戒行において一戒をもたもたず」〔聖光上人伝説の詞〕と吐露されました。もちろん、戒律を守る

うと努力するのは非常に大切で、実に尊い心がけです。けれども、法然上人でさえご自覚になられたこうした深い自己内省もまた、私たちには必要不可欠なものでありましょう。そして、こうした深い自己内省をされた法然上人だからこそ、こんな私たちを一人残らずお救い下さる阿弥陀さまの本願のお力にめぐり遭われ、「ただ念仏申すもの往生はする」と優しくお諭しになられたのです。

川に放った穴子が広い大海原で嬉しそうに泳ぎ回るのを舟の上で眺めながら、今度は冒頭のご法語が脳裏をよぎりました。よもや思ってもみなかったであろう再び大海原に還された穴子の歡びと、煩惱多きこの私が阿弥陀さまの本願力によってこの上のない西方極楽浄土へと往生させていただけるという歡びとが重ね合わさったからです。思わず。茜色に染まった西の空に合掌念仏いたしました。

ピチャピチャと 穴子歡ぶ 放生会

弥陀の救いに 重ね合わせて

合掌

(大正大学講師・林田康順)

水の種

石崎敬子

むかし、むかし。

ある山奥の村に、爺さまと婆さまが住んでおった。お盆がきたもんで、爺さまは里の村まで買い物に出かけた。里近くまで下りてくると、道はたで大勢の子どもらが、なにやら騒いでおった。はてさて、何をしておるやら。爺さまが覗き込んでみると、子どもらは手に手に木の枝を持ち、小さな白蛇をついたり叩いたりしておった。

「こらこら、可哀想でねえか。蛇も生き物だべ。放してやれ、放してやれってば」

「やだやだ、放してなんかやれねえ。せつかく見つけたんだぞ」

「そんなら、銭コやるから、放してやれ」

「ほんとか。銭コくれるんなら、放してやる」

爺さまから金をもらった子どもらは、すぐさま白蛇を草むらに放してやった。

「やれやれ、これで盆の買い物はできんが、婆さまも許してくれるだべ」



と爺さまは、もと来た道を引き返していったと。

家に帰り着いた爺さまは、さっそく助けた白蛇の話を婆さまに聞かせた。

「爺さま、それは良いことをした。盆の用意はできんでも先祖さまは許してくれるはず」

婆さまは怒るどころか、爺の話を、「うん、うん」と嬉しそうに頷いて聞いてた。

その晩のこと、爺さまと婆さまが寝ておると、家の戸を叩く音がする。

「誰だべ、こんな遅くに」

そつと戸を開けた爺様は、驚いた。月明かりの中に娘が立ってあった。この村ではついぞ見たこともない、それは美しい娘であったと。

「こんな遅くに、何の用だべ」

「はい、私は竜宮の竜王の娘、乙姫と申します。昼間、子どもにあやうく殺されるところ、爺さまに助けていただきました。お礼に

竜宮へご案内いたします。どうぞ、私と一緒においで下さい」

乙姫と名乗る娘は手を差し伸べた。爺さまは言われるままに、その手を取った。途端、爺さまの目の前は急に真つ暗になり、身体がふあつと宙に浮いたようになった。それつきり爺さまは何も分からなくなってしまうた。

「さあ、着きましたよ」

はつと気がついたとき、爺さまは広い立派な御殿の中でおった。

「ここが、竜宮か。きれいいじゃのう」

そこは白や赤の珊瑚、真珠で飾られ、きらきらとまばゆいばかりに輝いてあった。爺さまの前には、一の膳、二の膳、三の膳と次々に珍しいご馳走が並び、色とりどりの鮮やかな魚たちが、華やかに舞い始めた。見るもの聞くもの食べるもの、どれをとっても爺さまには生まれて初めてのもののばかりであったと。

時のたつのも忘れ、爺さまは楽しんでおつたが、ふと我に返った。

「わしだけこんな思ひをしておつては、婆さまに申し訳ない。乙姫さま、わしはそろそろ帰りたいのじゃが」

「わかりました。それでは、お土産を差し上げましょう」

乙姫さまは、家来たちに、金の箱や銀の箱、打ち出の小槌、桃色の珊瑚など珍しい品物をたくさん持ってきてせた。

「いやいや、わしはご覧の通りの年寄りじや、金も銀もいらん」

「命を助けて下さったお礼です。この中から一つお取り下さい、さあ、さあ」

是非にとの乙姫さまの言葉に、爺さまは宝の山に目をやった。どれもこれも大きくて立派な品物で、爺さまには重そうであった。よく見ると、大きな金色の箱の影に、小さな徳利が一本あった。

「おお、この徳利がええ。うちのはひびが

入って酒が漏れる。これならば婆さまが喜ぶだべ」

「あれ、こんなもので良いのですか。この中には、水の種が入っているだけです」

水の種と聞いて、爺さまは身をのりだした。

爺さまの村は、昔から水のことではたいそう難儀をしておつた。川はない。山も険しくて、雨が降つてもすぐに流れ落ちてしまふ。村人がこしらえた谷間の小さな池に、雨水を貯めておるが、雨が降らぬ日が続くと、たちまち干上がつてしまふ。そうなると村は死ぬの生きるのと大騒ぎであつた。

爺さまは、徳利をしつかりと胸に抱いたまま、頭を下げた。

一瞬、ぐらつと身体が大きく揺れた。気がつくとき爺さまは布団の中におつた。夜はしらじらと明け始めておつたが、婆さまはすやすやと眠つておつた。

「ああ、夢か。それにしてもええ夢だったな」

ふと、枕元を見るやると、夢で見たのとそ
っくり同じ小さな徳利が、ちよこんとあるで
はないか。



イラスト=ISHIKAWA

「これは、どうしたこと、また夢の続きか」
爺さまは思いっきりほつたを摘んでみ
た。痛いっ、どうやら今度は夢ではない。そ
つと徳利を持ち上げてみると、中でなにやら
ぼごぼごと音がしておる。爺さまは急いで外
に出て、徳利を傾けてみた。すると、ちよ
ろと水が流れ出した。

「婆さまっ、水だっ、水だぞーっ」

爺さまの大きな声に、何事かと婆さまは飛
び起きた。

見ると、爺さまの手の徳利から、水が流れ
出ておる。しかも水は尽きることなく、いつ
までも流れ出ておる。流れ出た水は地面をは
つて、幾筋もの小さな流れになり、やがて小
川となっていく。そして、小川は川となり、
大きな幾つもの沼となった。

こうして爺さまの村では、それからという
もの水で難儀をするということとはなくなった
と。

どんぺからっこ、ねっけど。

連載 『くすり箱』

スポーツとくすり

薬剤師
市川真人

スポーツの秋。そろそろ運動会等が開かれる季節です。筋肉痛、つき指、捻挫、打撲などを起こす機会も多くなることでしょう。

捻挫もひどいものになると、靱帯が切れてしまうということもあります。そういう場合はすぐに医師に診せます。軽いものなら三十分冷やし、消炎鎮痛剤を塗り、テーピングをして安静にしてい下さい。

つき指もよく冷やし、消炎鎮痛剤を塗り、そえ木をしたり、隣の指と一緒にしばります。

指をひっぱる人がいますが、脱臼ではないので効果はありません。痛みを増すだけなので止めて下さい。

打撲も冷やして安静にします。頭を打った時（脳震とう）も同じ様にしますが、五分位い経っても気がつかない時は医師に連絡を。

切り傷は、患部を水道水で洗い、サルファ剤又は、抗生剤入りの塗り薬を塗ります。

ジョギング人口の増加で、膝関節炎が増えています。よく冷やしてマッサージをし、消

炎鎮痛剤をすりこみ安静にします。しばらくしても痛みがとれないようなら医師に診てもらって下さい。

スポーツによるケガの応急手当の原則は四つで、①安静②患部を動かさないように③冷却④なるべくすぐに十五〜三十分位⑤圧迫⑥包帯で圧迫する⑦高く上げる⑧患部の腫れを防ぐ、足を高くして寝るとだるさがあるのと原理はおなじです。

打撲、捻挫の薬といえは消炎鎮痛剤です。軟膏やスプレー式のものもありますが、シップ剤が一般的です。シップ剤には、体表に温度的刺激を与えて局部の血流を改善させ、鎮痛する働きがあり、冷やす冷シップとがあります。

スポーツに伴うケガは、まず冷やすことが重要ですので、冷シップ剤は用意しておいて下さい。また、少し前までは医師しか使えなかった消炎鎮痛剤のインドメタシン入りのシップ剤も今は薬局でも買えてよく効きます。

コールドスプレー、瞬間冷却剤というものも市販されていますが、これは、医薬品でも医薬部外品でもなく、ガス剤の噴射による気化熱で急速に冷却するものです。一時的な治療剤にはなりません。やはりシップ剤などを用いることが大切です。

筋肉痛の時に入浴はとても気持ちがいいものです。血行不良の改善ができるので、ぜひおすすめします。入浴後にシップ剤をすることは、より温度差を生ずることで一段と効果が高まります。しかし、打撲、捻挫などの場合は、傷のあるなしにもよりますが、一〜二日は入浴しないほうがいいと思います。

皮膚が弱くシップ剤がかぶれてしまう人もいます。赤くなったり、かゆくなったときは、すぐにはがして下さい。また、かぶれやすい人は、ガーゼかティッシュペーパーを一枚おいた上からシップ剤を貼ってみて下さい。かなりちがうはずです。



読書紹介

真野龍海

心おだやかに生きる

小林貞賢著

B六版・百五十二項

妙定院発行（東京都港区芝公園四・九一八）



著者は東京教区芝組妙定院前住職、玉川組観音院開山・第三世住職小林貞賢上人である。浄土宗出版室長、小林正道師の御尊父である。

温厚篤実、黙々として地域教団のために、また、各役職において奉仕されていた。昨年来加療中の所、先般、六月、逝去された。

しかし、生前、三十年の間、毎月、書かされ、門前の掲示伝導板の聖句を新しく書きか

え、地域社会に、不断の教化をなされていた。その聖業ともいうべき掲示原稿が几帳面に残されてあって、生前から、家族の方々で出版の方向で作業が進んでいて、その、出版が図らずも、追憶の標ともなったのである。

内容の紹介として、小林正道師の「あとがき」を抜粋、引用する。

「寺は開かれていなくてはならない」三十年ほど前、若さ故の向こう見ずさで、こう師父

と交わしたことが始まりであった。

まもなく正門に黒漆塗りの掲示板が設けられ、そこには師父は白い墨で言葉をしたためた。記録によれば昭和四十六年六月十九日のことだった。それから毎月、——中略——絶えることはなかった。掲示板に足を止め見入る人は多く、書き留める人もしばしばいた。今月はまだですかと聞く人もいた。以前の言葉を尋ねる人もいた」

さて、このような一月一月思案の一句一句が、当然の要請として出版が進み、家族もいつしよになつて整理、編集されたのが本書である。

仏典からの引用も多いが、すべて、師が一月の推敲をされ、消化しやすい、分かりやすい言葉となつて、掲示板から道行く人に語りかけるような珠玉の文となつている。

掲示板に拝借するもよいし、一句一句、味読するもよい。

同書揭示文より抜粋

浄土を願う人は

浄土をつくる人である。

在りし日の

背を洗うこと

墓洗う

〈城卓〉

世の中のひとはみな

我が師である

どんな人も

この私に

ないものを

何か持っている

たった一言が

人の心を傷つける

人の心を暖める

となうれば

仏もわれもなかりけり

南無波阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 〈一遍〉

＝特集＝

総本山知恩院 吉水講



総本山知恩院吉水講

2001.9.28-10.4.

創立50周年



吉水講が50周年記念で知恩院月光殿に寄贈した彫刻観経曼陀羅



挨拶

総裁 知恩院門跡八十六世心譽康隆

吉水講五十周年を記念して

知恩院の吉水講は、あの大戦後の民心の荒廃を憂えられた当時の浄土宗教学部長吉水智承師の発案の下、一つには祖師報恩の為、また一つには念仏振興の為に、毎春の御忌大会に奉納すべく、昭和二十一年八月一日に創設され、爾来多くの方々の献身的なお力添えにより、宗門檀信徒の皆様方の澎湃たる共鳴を勝ち得て、宗祖七五〇年遠忌の十年前に設立したものです。従って本年が早くもその創立五十周年の佳年に当たります。その為、役員の皆様方の発願の下、全国の講員の皆様方の御協力を仰いで、知恩院の什宝として永く後世に伝え得るものを献納すべく、知恩院所蔵の図像に依る、世界初の立体木彫彩色観経曼陀羅を、幸いにも佛師服部俊慶師らの一年半に亘る御奉仕、献身的な御苦勞に依って無事完成を頂き、本年御忌大会直前の四月十六日に開眼法要を修することが出来まし

た。さらに来る九月二十八日から十月四日までの七日間に亘り、その披露を兼ねて海外を含む全国講員の皆様方に登壇を願って五十周年記念詠唱大会を催す運びとなっております。これも偏に歴代の総本部長を始め、理事長上人、各教区各寺院に吉水講を根付かせて下さった諸大徳と寺庭婦人の皆様方のお力添えと、講員の皆様方の精進によるところと、心より感謝申し上げているところです。できますれば、この五十周年を大きな契機として、吉水流詠唱の聲が益々響きわたり、お念仏の輪が大きく広がることを祈念してやみません。この度、法然上人鑽仰会ではそれを記念して雑誌『浄土』の特集号を作って下さること、時期に叶った好企画と慶びに堪えません。また、吉水講五十周年に当たり御協力下さった多くの皆様方に、心より厚く感謝し御礼を申し上げます。どうも有り難うございます。

南無阿彌陀佛 合掌和南

挨拶

総本部長 知恩院執事長 牧達雄

知恩院吉水講 創立五十周年を迎えて

知恩院の吉水講は今年五十周年という記念すべき年を迎えました。昭和二十七年に、敗戦の混乱がまだ治まらない時、出発いたしましてから、半世紀を経たのであります。ひと口で五十年と申しますが、私たちの一生涯にも比される年月であり、その間には幾多の問題もありました。そのひとつひとつの山を越えて着実に発展してまいりました五十年であります。それだけにこの道一筋にご指導賜りました先生方の感懐は無量なるものがあることと拝します。

そして現在知恩院吉水講に加盟の支部数は千七百支部に近づきつつあります、また加盟講員数は二万九千名を越え三万名になろうとしています。五十周年を迎えるに当たって、その加盟数は着実に増加しつつあります。

私はこの三万名に近い吉水講の実態に、たのしい信仰の力を実感するのであります。講員の皆様お一人お一人が、詠唱をお唱えし、その詠唱を通して、お念仏を詠唱の悦びの中にお称えするという共通した目的、目標をしっかりと共有しておられるということ、そしてその自覚のもとに講費を各自がご負担なさっているということ、当然のことのようですが、信仰団体の本当の在り方、力強さを感じるのであります。そのような意味において、



宗内最大の、そして力強い、半世紀におよぶ実績を積み重ねて来た吉水講であることを高く評価しなければならないと思います。

私たちはあと十年いたしますと、元祖法然上人の八百年大遠忌を迎えます。祖師法然上人が願われた御心は、申すまでもなく、お念仏をお称えし、称えつづけて、阿弥陀仏のお救いの世界に生き生きすることあります。この祖師のみ心におこたえし、報恩の誠を捧げ、全ての人々の平安と、社会の浄化に努めることが八百年大遠忌を迎えるための私たちの責務であります。その道はすでに吉水講の五十年の歩みと、更に六十年、百年、二百年と継続されるこれからの吉水講の将来にむかつての歩みの中にすでに具現されています。また、

発展させなくてはならない一筋の道であると信じます。

この基本的考え方にたつて、知恩院においては、今回の知恩院吉水講創立五十周年を平成二十一年に迎える法然上人八百年大遠忌お待ち受けの第一歩であると受けとめ、知恩院一山の大事な行事であると位置づけて万遺漏なきを期して行きたいと思えます。さらに、知恩院吉水講の力強い実績に範を求めて、八百年大遠忌は、お念仏の信仰の悦びに生きる檀信徒の皆様、念仏者の総力を結集して奉修したいと念じております。

知恩院吉水講五十周年記念奉納大会に、詠唱とお念仏の音が、華頂山にこだまし、充ち溢れることを祈念して止みません。

吉水講五十周年のあゆみ

昭和26年6月9～10日 初めて詠唱司指導者の養成道場が祖山に開設され、10名の指導者が誕生。

9月1日 宗規第23号として、詠唱司規定が施行される。

10月7～9日 第一回詠唱司会講習会が3日間行われる。

10月10日 第一回詠唱司検定が実施され、179名に及ぶ詠唱司が生まれた。

昭和27年1月 吉水講の規約が制定・施行される。

3月10日 詠唱司の講習・検定が行われ、以来毎年、知恩院や各教区で実施される。

10月9日 第一回吉水講大会を開催、17支部から約800名が参加。

昭和28年2月 詠歌和讃集（舞付）が発行される。また各霊場の御詠歌がレコードに吹き込まれ、3枚1組で3月発売。

4月21日 御忌法要に御詠歌を奉納。兵庫・大阪・滋賀・福岡各教区より約200名参加。

6月13日 冬の御詠歌、花祭和讃の新作発表会を開く。

10月6日 第二回吉水講大会において、兵庫教区安楽寺支部による詠歌劇「法然母子別れの場」を上演。

昭和29年4月21日 毎年、この日に御忌奉納。唱和会を結成。

7月18日 京舞の井上八千代先生の振付けによる新舞「本願調の舞」発表。

9月28日 第三回吉水講大会に約500名参加。

昭和30年4月 「詠歌集」第二集の初版発行 鈴鉦入れ箱を

発売。

「詠歌集」第二集の初版発行。

9月 吉水講大会、児童美術研究所の児童による舞踏劇を上演。

昭和31年4月 「詠歌集」第一・二集再版発行。

10月21日 九州地区の第一回吉水講大会を開く。

昭和32年4月31日 NHK京都第二放送より電波に乗り、朝八時より三十分間詠唱放送。御忌・黒谷・春・秋などの御詠歌を、花木・曾和・池上・垣内・瀬戸（尺八）・俵（琴）の出演で。

昭和33年9月 「詠歌集」第三集・琴・尺八譜面発行。

10月9日 吉水講大会で新曲のうつけみ、池の水の御詠歌発表。

昭和34年8月10日 ハワイ開教区で詠唱司検定を実施。

昭和36年3月3～4日 大遠忌法要に舞樂台奉納。華頂会館で詠唱大会を開催。

10月5日 吉水講十周年記念大会に約1000名が参加して盛大に行う。

昭和37年4月7日 吉水講十周年記念誌発行。

4月21日 宗派合併。

昭和38年3月2日 御忌奉納。新曲「月影・かりそめ」の御詠歌、新舞「うつけみ」の御詠歌を発表。

昭和40年9月 新浄土宗・宗規第30号「詠唱に関する規定」発効。

二十五霊場太字折本を發行。

10月5日 吉水講大会で新曲「十夜和讃」、新舞「ふるさとの御詠歌」発表。

昭和41年10月5日

吉水講大会。新曲「往生院の御詠歌」

昭和42年9月

新舞「いろは和讃」発表。

昭和43年9月21日

ソノシート第二集発行。

昭和44年10月5日

大会で新曲「一心寺の御詠歌」発表。

昭和45年3月8日

元總本部長・曾和探玄師遷化。

昭和46年11月2日

吉水講大会。新曲「霊まつり和讃」新舞「十夜和讃」発表。

昭和47年10月5日

大会で新曲「法然寺・源空寺」の御詠歌を発表。

昭和48年10月15日

宗規第56号として浄土宗吉水講規定が発行。

昭和49年4月4、24日

吉水講大会。新曲「報恩講寺の御詠歌」新舞「法然寺の御詠歌」発表。

昭和50年10月5日

機関誌「法の音」創刊号を発行。

昭和51年10月5日

二十周年記念大会を開催。支部旗授与。新曲「京都法然寺・欣浄寺の御詠歌」

昭和52年5月22、30日

「開宗和讃」新舞「報恩講寺の御詠歌」発表。

昭和53年5月

吉水講大会で新曲「二尊院の御詠歌」新舞「霊まつり和讃」発表。

昭和54年10月5日

大会で「誓願寺・月影の御詠歌」の新曲、「地蔵和讃」の新舞発表。

昭和55年10月5日

大殿前の舞臺台で随時、詠唱奉納。

昭和56年10月1日

吉水講大会。新曲「無縁仏供養和讃」新舞「彼岸和讃」発表。

昭和57年4月2日

大会で新曲「高祖善導大師和讃」「吉水講音頭(舞付)」新舞「開宗和讃」発表。

昭和58年10月5日

静岡教区本部よりハワイ親善交歓訪問。

昭和59年10月5日

大会で新曲「運のうてなの御詠歌」「追善供養和讃」新舞「高祖善導大師和讃」発表。

昭和53年5月

10月5日

詠唱カセット二巻一組で発売。

昭和54年10月5日

吉水講大会。新曲「二河白道和讃」「涅槃和讃」新舞「運のうてなの御詠歌」発表。

昭和55年3月10日

大会で新曲「二世安樂の御詠歌」「水子地蔵和讃」「成道法和讃」新舞「二河白道和讃」発表。

昭和56年10月1日

岸信宏現下 遷化

昭和57年4月2日

高島寛我現下 上任

昭和58年10月5日

善導忌庭儀式。雨のため知恩院廻廊を巡る。

昭和59年10月5日

善導忌大殿奉納。

昭和60年10月5日

吉水講大会。新曲「五重和讃」新舞「誓願寺の御詠歌」発表。

昭和61年10月5日

吉水講三十周年記念誌発行。

昭和62年10月5日

三十周年記念大会。詠唱庭儀式

昭和63年10月5日

新曲「法然上人生誕和讃」「青竜寺の御詠歌」発表。

昭和64年10月5日

記念事業 写経塔前に灯籠1対寄進

昭和65年10月5日

總裁明善大僧正現下遷化(93歳)

昭和66年10月5日

宗祖法然上人御降誕850年慶讃会

昭和67年10月5日

開山法要 岡山誕生寺

昭和68年10月5日

降誕慶讃法要庭儀式(雨のため堂内を廻る)

昭和69年10月5日

降誕慶讃法要詠唱奉納 舞臺台にて

昭和70年10月5日

降誕慶讃法要詠唱奉納大会、吉水講・おてつぎ音頭奉納 舞臺台にて

昭和71年10月5日

詠唱奉納大会、釈迦八相曼荼羅献納式 杉本直伯感謝状授与。

昭和72年10月5日

新曲「増上寺の御詠歌」「入(退)堂和讃」

昭和73年10月5日

新舞「法然上人生誕和讃」発表。

総本山知恩院吉水講創立50周年

11月5日 藤井実応祝下 上任

昭和58年6月11、17日 ホノルル浄土宗婦人会創設60周年・浄土宗ハワイ別院移転50周年記念吉水講ハワイ大会 約120名参加

10月4、5日 詠唱奉納大会 新曲「善導寺の御詠歌」新舞「青竜寺の御詠歌」発表

吉水講要装七条、五条（大師衣）新調 教区本部制定。

11月25日 「二十五霊場めぐり」発刊

12月1日 鶴岡隆玄総本部長任期満了につき退任
寺本哲榮総本部長就任

昭和59年10月4、5日 新曲「善光寺の御詠歌」新舞「かく山の御詠歌」発表

吉水講アロハ会沖繩の旅（沖繩袋中寺参拝、戦跡巡拝）

1月16、18日 吉水講大会 新曲「三上人遠忌和讃」

昭和60年10月4、5日 新曲「鎌倉光明寺の御詠歌」新舞「増上寺の御詠歌」発表

第三五回三上人遠忌記念吉水講詠唱奉納大会

昭和61年10月4、5日 御水屋（石水鉢館）落慶法要

12月11日 新曲合本発行

12月29日 三上人遠忌法要 庭儀式

昭和62年4月9日 三上人遠忌法要 詠唱奉納

10、11日 アロハ会 韓国慶州訪問

5月25、27日 吉水講大会

10月4日、5日 新曲「いけらは念仏和讃」新舞「善光寺の御詠

歌」発表

昭和63年10月4、5日 吉水講大会 新曲「三宝和讃」新舞「大本山光明寺の御詠歌」発表

平成元年4月1日 新講員手帳交付

10月4、5日 吉水講大会 詠歌・和讃練習用カセットテープ完成

平成2年4月20日 三門修復寄進

10月4、5日 吉水講大会 新曲「慶祝和讃」新舞「善導寺の御詠歌」発表

11月1日 知恩院三門落慶奉祝音頭 発表

平成3年1月10日 第1回詠唱特殊検定課目指導者講習会 完成

5月25、31日 中国善導大師ご霊蹟参拝 約260名参加

10月1日 吉水講四十周年記念誌発行

平成3年10月4、5日 吉水講大会

平成4年9月3日 総裁 藤井實應祝下 遷化

10月4、5日 吉水講大会 新曲「献灯和讃」発表

平成5年3月17日 総裁 中村康隆祝下 上任

10月4、5日 吉水講大会

平成6年4月3日 秋 コンピュータシステム稼働

10月4、5日 新曲「施餓鬼和讃」発表

10月21日 吉水講大会 新舞「小松谷の御詠歌」発表

平成7年1月14日 ハワイ開教100周年記念吉水講大会ホノルル

2月14日 鈴木錦承顧問 遷化（※1月14日は本葬の日）

4月6日 阪神淡路大震災被災地へ義援金支出

7月1日 寺本哲榮総本部長 遷化

牧達雄総本部長 就任

10月4～5日

吉水講大会 新曲「授戒和讃」

新舞「京都法然寺の御詠歌」発表。

平成8年4月20日

滋賀教区野洲組講員有志による法然上人劇「喜
びと救いを求めて」上演

10月4～5日

創立45周年記念吉水講大会 新曲

「知恩院和讃」新舞「夏の御詠歌」発表

平成9年10月4～5日

第46回詠唱奉納大会

平成10年5月22日

選択集奉納800年記念一宗法要で「選択集御
詠歌」「選択集和讃」を奉納

6月29～30日

第一回詠唱教司研修会開催（109名）

7月27日

「知恩院和讃」一宗認定

9月28日

創立50周年記念事業第1回実行委員会開催。

創立50周年記念事業の計画・推進に動き出す。

10月4～5日

第四七回詠唱奉納大会

第二回詠唱教司研修会開催

平成11年6月9～10日

創立50周年記念ビデオ「吉水講のご縁に結ばれ
て」撮影開始（小樽市）

平成12年2月2～3日

創立50周年記念ビデオ「吉水講のご縁に結ばれ
て」完成、全国支部に配布。

5月15日

創立50周年記念全国支部長大会を開催。

10月4～5日

第四九回詠唱奉納大会

12月1日

創立50周年記念ビデオ「吉水講のご縁に結ばれ
て」完成、全国支部に配布。

平成13年1月19日

創立50周年記念事業教区本部連絡会

4月16日

創立50周年記念 彫刻「観經曼陀羅」奉納

5月21～26日

開眼法要（總裁親修）

5月21～26日

創立50周年記念 中国善導大師ご靈蹟参拝

6月1日

役員改選 あらたに副理事長を置く。

創立50周年記念奉納大会

9月28日（金）から10月4日（木）まで、以下の予定で
毎日1,500～2,000人の吉水講講員が全国から
つどい、御影堂の法然上人の前で詠唱奉納します。

9月28日（庭儀式と開白法要）ハワイ開教区

9月29日 九州地区 中四国地区

9月30日 東海地区

10月1日 大阪教区 奈良教区 京都教区

10月2日 関東以北 北陸地区 和歌山教区 兵庫教区

10月3日 滋賀教区

10月4日 滋賀教区

庭儀式

9月28日に開催

中村康隆祝下を中心にご詠歌の指導者と講員1,000
名が参加して、三門前から周辺でおこないます。

この他にもさまざまな記念事業が計画されています。

2001年秋。全国の講員が知恩院に結集します。吉水

講員をはじめ多くの檀信徒のみなさんが吉水流詠唱のあ

たたかさと荘厳さをじかに味わってくださいよう、ご案

内します。

吉水講集い五十周年の歌

池上靈心 作詞
松濤 基 作曲

明るく

あつさ さむさ もさ いと なー く つど
つらさ さむさ もさ いと なー く つど
おい おい わかき もさ いと なー く つど
いい のの きえが なおみ ーに み ち び から れれ
ほとけとつーねに さしむかい } と なえとなえて 五十一わん
とーきをわすれて まいづつけ
あかるくたのしく なごやかに

た だひ た す らーに なー む あ み だ

吉水講集い五十周年の歌

池上靈心 作

一、暑さ寒さも 厭いなく

集いの「きずな」に 導かれ

佛と常に さし向い

唱え唱えて 五十年

唯 ひたすらに ナムアミダ

二、辛さ苦しさ だきしめて

集いの「笑顔」に 迎えられ

時を忘れて 舞いつづけ

唱え唱えて 五十年

唯 ひたすらに ナムアミダ

三、老いも若きも 手をつなぎ

集いの「ぬくみ」に 育てられ

明るく楽しく 和やかに

唱え唱えて 五十年

唯 ひたすらに ナムアミダ

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●題時

〈特選〉

時空越え千年とやかに観世音

宇高一慧

千手観音を拝している。千の御手を自在に伸ばしておられるお姿を、衆生を済度されるその御手に焦点を当てて、そこに時空を越えたさやけさを感じているのである。上の句のような手に負えぬ言葉も生きている。

〈佳作〉

梅雨長し友の電話に時忘る

金谷 友江

真打の時そばを聴く夜長かな

大場 清

噴水の向こうきらきらする時間

新藤 麻美

●題青

〈特選〉

青葉光返し校舎の壁時計

簾 八重子

「あおばかげ」と読んでほしい時は、「光」などとすることがある。校舎と運動場の間に植え込みがあつて、教室を暗くしない程

選者=増田河郎子

〈特選〉

風入れや布目の褪せし師の句集

片桐てい女

●自由題

度の、細身で丈高い木が、等間隔に植わっている。時計の関係が目に見える。

〈佳作〉

茄子漬の殊に青きをつまみけり

柴田 英彦

研ぎ屋来てきくらきら光る青葉の座

森 月子

青き風流す風鈴浜近し

増田 信子

虫干しである。土用の晴れた日に、日陰に

出して風に当てる。本を干し広げていて、師の句集に目が止まったのだ。少し荒い目の布地の表紙が褪せている。この歳月をじっくりと偲んでいるのである。

〈佳作〉

海の日や手足の長い女たち

安曇 恵子

水芭蕉ついに溺れてしまいけり

池田 伊吹

菖蒲湯に九九習う子と声合わす

北川 弘子

浄土誌上句会のお知らせ

題

※季語ではありません

顔

手紙

自由題

時

紫陽花の駅暮れなつむ古時計
どくだみや路地の片隅時止まり

職引さし時の流れに惑うとや
時かけて祖母の縫はれし晴着かな

時の日や風やすみなき蔵の町
梅雨に入る形見の時計の螺子を巻き

ひと時のつもりが終の住み栖かな
夏大根青葉もろともききみけり

青垣に匂わせもして藤の花
真つ青な空にきらつと夏の朝

青
ずぶ濡れの鴉飛び立つ青柳
青梅や鈴なりたるや無人駅

河合登美枝

山本のり子

中島富士子

細田初枝

片桐てい女

周東澄江

中島一子

金谷友江

嶋田喜代子

山本美代子

河合登美枝

山本のり子

締切・九月二十日

発表・『浄土』十一月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

青嵐海の真中の音がする

青く澄む湖底湖遙か夏霞

青空を端より呑んで入道雲

師に従くや青葉溢るる法の庭

青梅の季節 姑出番待つ

奥利根や夕日に挽む鮎の竿

教師より妻への家路雁渡る

診療を待つ順混めり梅雨の蝶

目の手術おびえたる日や梅雨に入る

雨上る小雀低く初飛行

自由題

日のしずくためて滴る柿若葉

宵祭り風にくずれる真綿菓子

白壁に波紋揺れおり菖蒲園

梅雨めくと壁紙の染み浮き立ちぬ

堂狩り庭下駄下るす映の宿

力癩競つ子供等衣更

夏蝶の舞に移る木の暗みかな

荒布干す浜の女や高き声

うつし世の汚れにあらず牡丹散る

風化せる流人の墓や都草

おろがみてひと時無なり原爆忌

時空越え想いははるか夏の夢

時の日に葉書を入れて音を聞く

腕時計はすせば白き日焼けあと

夕立や時報の音を聞きのがし

夕涼し時を忘れて立ち話

中島富士子

細田初枝

片桐てい女

周東澄江

中島一子

周東澄江

宇高一慧

金谷友江

嶋田喜代子

山本美代子

中村真一

板倉左武朗

小久保あきを

島谷ときを

増田信子

石原新

池田伊吹

山本のり子

中島富士子

細田初枝

嶋田喜代子

山本美代子

大村和代

加藤政男

浜口佳春

谷しげ子

漫画で楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

一期一会

「いちごいちえ」と読み、「一生に一回きりですよ」という言葉。だから「今この時を大切にしてください」という意味で使われる。もともとはお茶の言葉。千利休の弟子の書物にこの言葉が見える。お茶の言葉とはいえ、お茶は臨済宗を開宗した栄西が日本に持ち帰ったもので、仏教とお茶の関係は深い。でも、今この時とは知りつつも、というのが私たち凡夫の悲しさ。だからこそいつでも思い出したい言葉のひとつですね。



木陰より甍見つめる終戦日 岱潤

今年の夏は、小泉首相の靖国神社参拝が大問題となって連日マスコミを賑わせた。結局は日にちを先たおししての参拝を行い、賛成派、反対派どちらからも批判の対象となる参拝となった。

靖国の問題は、戦前の教育を受けたものと、戦後教育で育ったものとはその感情の背景に大きな違いがあり、議論をすることすら難しい。私などはその議論を聞いてみると、どうも戦争体験の継承の仕方に「種類あること」に気づかされる。ひとつは平和教育の原点として戦跡を学び戦争そのものを考えるためと、皇軍の顕彰の地として戦跡を学び、その恩

恵に感謝するためとの二つである。

靖国思想といわれる「お国のため天皇のため戦って死んで神となる」信仰をしている人々を批判するつもりは毛頭ないが、その対極といわれる沖縄の平和の礎（いしじ）の「戦争で亡くなった敵も味方も市民も含むすべての人の死を悼み、一度と戦争をしない誓いをする」施設のほうに、より反戦の願いが強いことを感じる。

沖縄の人々がよく言う「命（ぬち）どう宝」の精神、自然を畏敬してすべての命を畏敬するやさしい人々の心を学ぶこと、沖縄を学ぶことの必要を強く感じている。
(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

村田洋一

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十七巻九月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十二年八月二十日
発行 平成十三年九月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーディーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八 六九四七

FAX 〇三三・五七八 七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七



道路工事



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



落下物注意



民衆近し、静かに



足元注意



低空飛行



注意口



注意口



安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



禁煙



破れ物注意



安全第一



歩行者注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、
ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルール
を守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一
のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全を
お届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

浄土特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然上人鑽仰会まで。

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶 数珠

水晶腕念珠

水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円

② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

水晶数珠 ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円

プレスレッド ④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円

⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えです。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。

水晶数珠プレスレッド



仏壇用宗旨布教額

家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183ミリ)

1,260円(送料別)

小(273×142ミリ)

480円(送料別)

選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)

